

プルースト『失われた時を求めて』における サドマゾヒズム¹

吉川 一義

プルーストの『失われた時を求めて』は、日本ではあまりにも審美的に読まれてきたのではないか。紅茶に浸したマドレーヌの味覚から過去の田舎町がよみがえる挿話は、たしかにイメージとリズムが調和して間然するところがない。過去の想起ではなく現在の印象を描写するくだりでも、たとえば降りはじめた雨を認識する一瞬をプルーストはつぎのように書く。「小さな音が窓ガラスにして、なにか当たった気配がしたが、つづいて、ばらばらと軽く、まるで砂粒が上の窓から落ちてきたのかと思うと、やがて落下は広がり、ならされ、一定のリズムを帯びて、流れだし、よく響く音楽となり、数えきれない粒があたり一面をおおうと、それは雨だった。」(I, 100; ①230-231²)。このような回想や印象の幸福な瞬間を明るみに出すことばの魔術に、読者が惹かれるのは当然であろう。

しかし『失われた時を求めて』の大半を占めているのは、むしろ苦痛の体験である。しかもプルーストの多くの登場人物は、その苦痛をみずから自分自身に課しているよう

¹ 本稿は、2019年12月21日、京都大学文学研究科フランス語学フランス文学研究室主催の「個人全訳『失われた時を求めて』(岩波文庫、全14巻)刊行完結記念講演会」における講演原稿である。ただしフロイトへの言及など一部は、筆者が2020年3月30日にコレージュ・フランスでおこなう予定であったフランス語講義原稿「Proust sadomasochiste?」(<https://www.college-de-france.fr/site/antoine-Compagnon/guestlecturer-2020-03-30-16h00.htm>)によって補足した。なお本稿の概要は、「プルーストのサドマゾヒズム」と題して2020年「文藝界」2月号に発表されたことをお断りする。

² 以下、括弧内に、まずタディエ篇プレイヤッド版『失われた時を求めて』(*À la recherche du temps perdu*, édition publiée sous la direction de Jean-Yves Tadié, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 4 vol., 1987-1989) の、つぎに拙訳『失われた時を求めて』(岩波文庫、全14巻、2010-2019) の、それぞれ巻数と頁数を示す。

に見える。小説の第1篇第1章「コンブレー」で、主人公の少年は、母親からお寝^{やす}みのキスが与えられず、悲しみのあまり意固地になり、階段の上で母親を待ち受けるという禁じられた振舞いに出て、わが身を窮地に陥らせる。つづく第2章「スワンの恋」に描かれているのは、粹^{じゆん}筋^{しん}の女オデットに恋焦がれ、嫉妬に駆られるスワンの苦しみである。それと呼応するかのよう^{よう}に、主人公の「私」は、のちに恋人アルベルチヌへの嫉妬に悶^もえ苦しみ、その嫉妬は、恋人の死後にまでつづく。ブルーストの小説は、読者がうんざりするほど、恋愛の幸福ではなく、「嫉妬」の地獄をくり返し描いている。スワンといい、主人公の「私」といい、なにゆえ『失われた時を求めて』には、万人受けのしない、共感を呼ばぬ人間のすがたばかりが、つまり、わが身に苦痛をしょいこむ人間ばかり描かれるのか。みずから自分に苦痛を与えるのはサドマゾヒズムではないか。サドマゾヒズムなる概念は、それが『失われた時を求めて』の中心を占めている以上、もしかすると全篇を読みとくカギになるのではないか。これが本稿の問題意識である。

私が「サドマゾヒズム」という概念を想いついたのは、小説の最終篇『見出された時』に出てくる場面、第一次大戦中、空襲下のパリのホテルで、同性愛者のシャルリュス男爵がわが身を鞭打たせる場面からである。夜のパリを歩き疲れた主人公の「私」は、そこが男娼館だとは知らずとあるホテルの部屋でのどの渇きを癒しているとき、この衝撃的な場面に遭遇する。

不意に、廊下のはずれのひとつだけ離れた部屋から、押し殺したうめき声が聞こえてくるような気がした。そちらへ駆け寄った私は、ドアに耳を押しあてた。「お願いです、お赦しを、お赦しを、ご勘弁を。どうかほどいてください、そんなに強く打たないでください」と言う声が聞こえる、「両方のおみ足に接吻いたします、おっしゃるとおりにいたします、もう二度としません。どうかご勘弁を。」「ならん、極道者め」と、もうひとつの声が答える、「お前がそんなにわめいて這いずりまわるから、ベッドへ縛りつけられるんだ、勘弁ならん」という声のあと、ぴしりとバラ鞭の鳴る音が聞こえてきたが、おそらくその鞭には鋭い鉾^{びょう}がついているのだろう、つづいて苦痛の叫びが響いた。そのとき私は、この部屋の横に小さな丸窓があり、そのカーテンが閉め忘れられているのに気づいた。暗がりを忍び足でその丸窓まで近寄った私が目の前に見たのは、岩に縛られたプロメテウスのようにベッドに縛られ、果たせるかな鉾^{びょう}のついたバラ鞭でモーリスに打ちすえられ、すでに血まみれになり、こんな拷問がはじめてではないことを証拠だてる皮下出血の痕に覆われた男、シャルリュス氏だった。(IV, 394; ⑬319-320)

この場面でシャルリュス男爵を鞭打っているのは、男娼館に雇われたモーリスという名の「宝石店の店員」(IV, 396-397; ⑬325)である。モーリスの顔立ちは、シャルリュスが恋焦がれながら振られてしまった美青年モレルとそっくりで、男爵はこの若者のもとで「モレルと快楽を味わう幻想をいただくことができた」という(IV, 396; ⑬326)。男爵の性的妄想は、屈強な男に自分を痛めつけさせる夢にある。男娼館の経営を任されている男爵の昔の恋人ジュピアンは、男爵に「この夢が現実化したような幻想」を与えるために「木のベッド」を「鎖とよく合う鉄のベッド」にとり替え(IV, 419; ⑬373-374)、男爵の相手役を凶悪犯に見せるため、雇い入れた青年たちを「女門番殺し」や「牛殺し」に仕立てあげる(IV, 396; ⑬324)。しかし男爵自身が「わしを極道者めと呼ぶのが、いかにも教えられたとおりにやってる感じなんだ」(同上)と嘆くように、その夢が完全に満たされることはない。男娼館に雇われた若者たちは、男爵の謝礼を受けとった青年が「これは歳とったおやじとおふくろに送りますよ」(IV, 405; ⑬345)と言うように、おおかたは心根の優しい男たちであるからだ。おまけに男爵自身も、男娼館のこのような演出を重々承知している。男爵が男娼館の青年のひとりにつぎのように言うからだ、「嬉しいことを言ってくれるねえ。それに言いかたがうまい！ まるでほんとうみたいだ。結局、ほんとうだろうが嘘だろうがどうでもいいんだ、こいつがほんとうだと俺に信じさせたんだから」(IV, 404; ⑬342)。

さて、叶わぬ夢を追ひ求めて自分を鞭打たせるシャルリュスは、苦痛を受けることに快感を覚えるのだから、ふつうならマゾヒスト(仏語マゾシスト *masochiste*)と呼ばれるところであろう。ところが『失われた時を求めて』には「マゾシスト」なる語は一度もあらわれず、この一節でも「サディストらしい快楽」(IV, 404; ⑬341)とか、「サディストには[...] 悪への渴望がある」(IV, 406; ⑬346)とか、一貫して「サディスト」(仏語サディック *sadique*)なる語が使われている。十八世紀のフランス作家サドに由来する「サディスト」という語にせよ、十九世紀のオーストリア作家ザッハー = マゾッホの名に基づく「マゾシスト」という語にせよ、いずれも十九世紀末にはフランス語として定着していた(『グラン・ラルース仏語辞典』『トレゾール仏語辞典』³)。にもかかわらずブルーストは、なにゆえシャルリュス男爵をもっぱら「サディスト」と呼ぶのだろう。

もちろんブルーストが「サディスト」なる語を広く認められた意味で用いている場合もある。女優のラシェルが舞台裏でとあるダンサーに色目をつかい、そばにいる恋人のロベールを嫉妬で苦しめたあげく、「ごらん、この人、苦しんでるのよ」と言ったとき、

³ *Grand Larousse de la langue française* date l'apparition du mot «sadique» de 1888 et celle de «masochiste» de la fin du XIX^e siècle; *Trésor de la langue française* date la première de 1882 et la seconde de 1896.

語り手がラシエルは「一時的にサディストの残忍な衝動」(II. 477; ⑤390)に駆られていたと説明するのは、「他人に苦痛を与えて快楽を味わう人」というサディストのふつうの用法にほかならない。

なぜシャルリュスが「サディスト」なのか、この疑問を解消するには、小説のもうひとつの「のぞき」の場面、小説冒頭の田舎町コンブレーのはずれのモンジュヴァンで主人公の少年がかいま見るヴァントウイユ嬢とその女友だちの同性愛の場面をふり返らなければならない。そこでも同様に「ヴァントウイユ嬢のようなサディスト」と、「サディスト」なる語が使われているからである。すこし長い引用になるが、この場面を読んでおこう。

モンジュヴァンで感じた印象がもとになって、当時は理解できなかったその印象から、ずいぶん後に私はサディズムの概略を知ったのかもしれない。[...] モンジュヴァンの沼まで出かけ、家を見おろす土手のやぶの日陰に寝ころんでいたところ、そのまま寝てしまった。[...] 目を覚ますと、あたりはほとんど真っ暗で、起きあがろうとした拍子にヴァントウイユ嬢が目に入った。[...] 娘は正式の喪服すがただった。父親を亡くして間がなかったからである。[...]

ヴァントウイユ嬢のサロンの奥では、暖炉のうえに父親の小さな肖像写真が置いてあった。ところが外の道路から馬車の音が聞こえてくると、娘は慌ててその写真を手にとってソファーに身を投げ出し、小さなテーブルをそばに引き寄せて写真を置いた。[...] やがて女友だちが入ってきた。娘は立ち上らずに友だちを迎え、両手を頭のうしろに置いていたが、相手が座れるように、そのままソファーの端に後ずさりした。[...] やがて立ちあがると、鎧戸を閉めようとして、うまく閉まらないふりをした。

「開けときなさいよ、あたし、暑い」と友だちが言った。

「だって困るでしょ、見られたら」とヴァントウイユ嬢が答える。

[...] 「見られたら、と言ったのは、本を読んでいるところを見られたら、という意味よ。だって困るでしょ、べつにどうってこともないことをしてるだけなのに、だれかに見られてると考えるのは。」

[...] 「そうね、きっと見られるわ。なんたってこんな時間で、人通りの多い田舎なんだから」と友だちは皮肉を言い、「でもそれがどうしたの?」と、さらに言葉をついだ [...]、「見られたとしたら、かえって好都合じゃないの。」

[...] クレープ地のブラウスの襟ぐりに友だちがいきなり接吻するのを感じて、ヴァントウイユ嬢は小さな叫び声をあげて逃げ出した。ふたりが飛び跳ねて追いかかけあい、ゆったりした袖をまるで翼のように羽ばたかせて、くっくつと笑ったり、ぴいぴいと鳴き交わすのは、愛しあう小鳥同士を想わせる。やがてヴァントウイユ嬢がソファーに倒れこむと、そのうえに友だちの身体が覆いかぶさった。ところが友だちは、元ピアノ教師の肖像写真が置いてある小さな

テーブルに背を向けている。ヴァントウイユ嬢は、自分が注意してやらなければ友だちが写真を見ることはないのを察して、いま気づいたばかりだと言わんばかりにこう言った。

「あらいやだ、お父さんの写真が私たちを見てるじゃないの。いったいだれがこんなところに置いたのかしら、なんどもこんなところに置いちゃいけないって言ってあったのに。」〔…〕

「わかるかしら、私がこの醜い老いぼれをどうしてやりたいのか」と友だちは肖像写真を手にとって言った。そしてヴァントウイユ嬢の耳元になにかささやいたが、私には聞こえなかった。

「まさか、あなた、そんなことはできないでしょ。」

「まさか、できないって？ つばを吐くのが？ これのうえに？」と友だちはわざと乱暴に言った。

私にはそれ以上は聞きとれなかった。ヴァントウイユ嬢がけだるげに、ぎこちない仕草であたふたと、正直な悲しい顔をして鎧戸と窓を閉めたからである。しかしいまや私にも、ヴァントウイユ氏が生涯にわたり娘のために堪え忍んだ苦痛の報いに、死後、その娘からどのような扱いを受けたかは一目瞭然だった。

〔…〕ヴァントウイユ嬢の習癖は、外観上は完全な悪としか見えず、ここまで完璧に体現された悪のすがたにはサディストの女でなければ出会えなかったかもしれない。〔…〕ヴァントウイユ嬢のようなサディストは、悪の芸術家である。(I, 157-162; ①344-352)

この場面で「サディスト」と呼ばれるにふさわしいのは、常識的に考えれば、性愛の前戯としてヴァントウイユ嬢の亡き父親の遺影につばを吐きかけるという冒瀆行為に出る女友だちのほうであろう。引用した小説本文にも「『まさか、できないって？ つばを吐くのが？ これのうえに？』と友だちはわざと乱暴に言った」と明記されている。ところがブルーストは、あくまでヴァントウイユ嬢のほうを「サディスト」と呼んでいる。これはどう解釈すべきなのか。

ここで留意すべきは、ヴァントウイユ嬢は、ただ受け身でこの冒瀆をこうむるわけではないことである。ヴァントウイユ嬢は、みずから「小さなテーブルをそばに引き寄せて写真を置いた」うえで、「自分が注意してやらなければ友だちが写真を見ることはないのを察して」、「あらいやだ、お父さんの写真が私たちを見てるじゃないの」と言って、冒瀆行為のお膳立てをしている。つまりヴァントウイユ嬢の快楽は、愛する父親の写真を冒瀆されるという「マゾヒスト」特有の受け身の快楽に見えて、そのじつ冒瀆をそそのかして自分に苦痛を与えさせるという「サディスト」の能動的快楽でもあるのだ。シャルリュス男爵の場合と同様、ヴァントウイユ嬢の場合も、「サディスト」なる概念は、ずっと後の一九六〇年代にようやく定着する用語であるが「サドマゾヒスト」の意味で用いられているのである⁴。

⁴ *Le Grand Larousse de la langue française* date la première apparition du mot « sadomasochiste » de 1964,

しかし当時、いまだ用語は存在しなかったとはいえ、この事態を炯眼の観察者なら察知しなかったはずはない。実際、同一人物のなかにサディストとマゾヒストの性向が共存しうること気づいたのは、ブルーストひとりではない。ほぼ同時期、フロイトも同様の事態を確認していた。もしかすると精神分析の創始者は、『失われた時を求めて』の作家に影響を与えたのだろうか。当時フランスでは、ドイツ嫌悪と反ユダヤ主義が相まってフロイトの受容が遅れ、その著作がはじめて仏訳されたのは1920年12月から21年2月にかけてにすぎない。「ルヴェ・ド・ジュネーヴ」誌に3回にわけて掲載された「精神分析の起源と発展」（原著は1909年の「精神分析について」）がそれである。たまたま連載の最終回を読んで感激したアンドレ・ジッドは、1921年5月、ブルーストに「フロイトの驚くべき論文」をまだ読んでいなければ喜んで貸すと書きおくれた（*Corr.*, XX, 262⁵）。残念ながらブルーストは、この勧めを受けいれた証拠がないばかりか、のちに批評家ロジェ・アラールに「私がフロイトの文章を理解できなかったのは、その著作を読んだことがないからです」と書いた⁶。

このように直接の影響は認められないけれど、フロイトが『性理論のための3篇』（1905）に記したつぎの見解は、ブルーストの「サディスト」をめぐる記述と驚くほど類似している。「この目標倒錯の最も目立った特徴は、その能動形式と受動形式がいつも、同一の人物のなかに二つ揃って見出される点にある。性的関係において他人の苦痛を生み出すことで快を感じる者は、性的関係から自分に生じるかもしれない苦痛を、快として享受する能力もある。サディストはつねに、同時にマゾヒストである⁷。」小説と精神分析は、並行して独自の道を歩みつつ、そう命名される以前の「サドマゾヒスト」という概念とともに到達したと考えるべきであろう⁸。

ブルーストの小説に戻ると、冒頭の「コンブレ」になぜ唐突に女性同性愛（ブルーストのいう「ゴモラ」）にかんするのぞきが出てくるのか、いまや明らかだろう。それは小説末尾の男娼館にあらわれる男性同性愛（同じく「ソドム」）をのぞき見る場面を予告し、それと対をなすためなのだ。同性愛の当事者たるヴァントウイユ嬢とシャルリュス男爵がともに「サディスト」と呼ばれているのも、偶然とは思われない。ヴァン

et celle du mot « sadomasochisme » de 1953. *Trésor de la langue française* partage grosso modo ces datations.

⁵ ブルーストの書簡の引用はコルブ編『ブルースト書簡集』（*Correspondance de Marcel Proust*, texte établi, présenté et annoté par Philip Kolb, Plon, 1970-1993）に拠り、巻数と頁数を示す。

⁶ *Ibid.*, p. 447.

⁷ Sigmund Freud, *Trois essais sur la théorie sexuelle*, traduit de l'allemand par Pierre Cotet et Franck Rexand-Galais, PUF, 2010, p. 35. 引用は、ドイツ語原典からの渡邊俊之訳（『フロイト全集 9』、岩波書店、2009, p. 59）に拠る。筆者の講演直後、フロイトのこの一節の存在をご教示くださった佐々木徹教授（京都大学文学研究科）に謝意をあらわす。

⁸ ふたりの同時代人のこれ以外の類似についてはつぎの著作を参照：Jean-Yves Tadié, *Le lac inconnu. Entre Proust et Freud*, Gallimard, 2012.

トゥイユ嬢の同性愛をのぞき見る場面に前置きのように配置されていた文言、「モンジュヴァンで感じた印象がもたになって、当時は理解できなかったその印象から、ずいぶん後に私はサディズムの概略を知ったのかもしれない」という文言は、最終篇で語られるシャルリュス男爵が鞭打たれる場面を予告していると考えべきだろう。シャルリュス男爵とヴァントゥイユ嬢は、「ソドム」と「ゴモラ」を代表する一対の「サディスト」として、つまり現代の用語ではサドマゾヒストとして、長篇の冒頭と末尾に登場しているのである。

以上の概略は拙訳『失われた時を求めて』第13巻の「訳者あとがき」でも触れたが、プルーストの長篇を全訳した現在の私の脳裏にとり憑いているのは、わが身に苦痛を与えるこのようなサドマゾヒストは、ふたりの同性愛者にとどまらず、『失われた時を求めて』の多くの登場人物、たとえば母親のお寝みのキスを奪われて衝動的行動に出るコンブレの少年にも、嫉妬にもだえ苦しむスワンや「私」にも、さらには人種差別の屈辱をわが身にひき寄せるユダヤ人にも認められるのではないか、という仮説である。

『失われた時を求めて』が母親の「お寝みのキス」を奪われた少年の悲しみで幕を開けるのは偶然ではない。母親のキスに執着する少年は、健全な精神を自認する読者からは「マザコン」として毛嫌いされるだろう。「重大な用件がある」(I, 28; ①75)という母親への伝言をフランソワーズに託し、「返事はありません」(I, 31; ①82)という答えを受けとった少年は、二階で客の帰るときをうかがい、そんなことをしたら「寄宿舎行き」(I, 33; ①85)になるのを覚悟のうえで、母親があがってきたら「接吻しよう」

(I, 32; ①83)と階段の上で待ちかまえる。この少年の振る舞いもまた、みずからわが身を窮地に追いやり苦痛をひき寄せる点で、サドマゾヒズムと形容できるのではないか。

この小説冒頭における少年の不安は、「スワンの恋」がひきおこす不安と同じものだと語り手は言う。少年が母親に宛てた「重大な用件がある」という手紙をめぐり、語り手はこう述懐する。「私は、かりにスワンがこの手紙を読み、その目的を見抜いたなら、私がさきを感じた不安をあざ笑ったにちがいないと考えた。ところが事実はその反対で、ずっと後に知ったことだが、スワンは同じような不安に生涯の長い歳月にわたり苦しめられていたのであり、スワンほど私をよく理解してくれる人はいなかったのかもしれない」(I, 30; ①79)。

スワンが自分を罰するような苦痛をわが身に与えるのは、恋人オデットへの嫉妬に苦しむときである。ところがスワンの嫉妬には、確たる根拠がない。嫉妬とは「恋心に寄りそう影」(I, 271; ②209)であり、恋心が生みださずにはおかない妄想だとプルーストは言う。「スワンの恋」の末尾で、スワンやオデットと同じサロンに通っていたコタ

ール夫人は、往時をふり返ってスワンにこう言う、「オデットさんはどこにいらしても、しばらくすると必ずあなたのお話をなさるんです。もちろん悪口じゃありませんわ」(I, 369; ②410)。さらに夫人は「あの人、あなたが大好きなんですよ。ともかく、あの人の前じゃ、あなたのことをあれこれ言うのは御法度ですわ。ひどく叱られますから」(I, 369; ②411)と請け合う。最終篇『見出された時』のゲルマント大公妃邸では、オデット自身が昔を回想して「私」に「スワンさんの場合は、わたしのほうがあの人を狂おしいばかり愛していましたの」(IV, 598-599; ⑭242)と告白する。

語り手もまた、スワンが嫉妬に苦しむのは「間違っって解釈された可能性のある状況にもとづきオデットがほかの男と通じていると想定される瞬間だけ」(I, 279; ②223)だという。スワンは、「オデットの家からもち帰る官能的な思い出のひとつひとつ」のおかげで、「女がほかの男といるときにどんな熱烈な姿態やどんな恍惚の仕草をするのかが想像できるように」なり、「そうしたものが新たな道具となつて、拷問にも等しい責め苦を増大させる」(I, 272; ②209)というのだ。

スワンのオデットにたいする嫉妬は、男だけではなく、女にも向かう。かつてオデットが「ヴェルデュランの奥さまったら、いまじゃ、あたしのことでもちきりなの。かわいい人とおっしゃって、あたしに接吻なさるの」(I, 355; ②380)と言っていたことを思い出したスワンは、オデットを問い詰め、「その手のことはどんな女性とも一度もやったことはありません」(I, 356; ②382)と無理やり言わせるが、それでも納得できず、「ラゲのノートルダムのメダルにかけて誓えるかい」(同上)と追求し、ついにオデットから「もしかしたらずいぶん前に、自分でなにをしているのかもわからずに、もしかしたら二度か、三度」(I, 357; ②384)という告白をひき出す。語り手によれば、「スワンの嫉妬心は、どんな敵でもためらうほどの渾身の力で打撃を食らわせ、かつて経験したことのない残酷な苦痛を味わわせたのに、それでもまだ苦しみようが足りないとみて、さらに深い傷を負わせよう」(I, 358-359; ②387)とする。わが身にみずから苦しみを与えるこのスワンの態度こそ、明白なサドマゾヒズムの特徴でなくてなんであろう。

それでは「私」の恋、初恋の相手であるジルベルトや、その後のアルベルチーヌへの恋は、どのようなものであったのか。少年の「私」は、スワンの娘ジルベルトに恋焦がれるが、相手は自分をばかにしているのではないかという猜疑心を拭えず、自尊心ゆえに自分の恋心を素直に打ち明けることができない。「私」の来訪のせいでダンスのレッスンへ行けなくなったジルベルトが不機嫌になったと感じた「私」は、自分も不機嫌になり、ふたりは「しばしばたがいに黙りこむか、いや、そう、などとひと言を口にするだけ」で、「ふたりが友情と幸福に使うこともできたはずの時間を台なしにした」と

いう (I, 573; ③342)。「私」は「きみはやさしくないね」と言い、ジルベルトは「やさしくないのはあなたのほうでしょ」と答える。「私」は「ぼくのどこがやさしくないって言うんだい？」と問い詰め、ジルベルトには「ぼくがどれほどの苦しみを受けているかがわからない」と嘆く (I, 574; ③344-345)。ここで「私」はとんでもない勝手な解釈に走る。「この苦しみということばを聞いたジルベルトは、もしも私の愛を疑っていたのなら喜んだはずなのに、反対に怒ってしまった。そこで勘違いに気づいた私は、もはやジルベルトの言うことは意に介すまいと心に決め」、相手が「あなたのこと、ほんとに好きだったのよ、いつかあなたにもわかる日が来るわ」と言うのも聞き流して信じて、「もうジルベルトに会わない決心」をする (I, 574; ③345)。

ところがジルベルトは、『見出された時』のタンソンヴィルで「私」に再会したとき、「あのころ私はどれほどあなたを愛していたことでしょう」(IV, 269; ⑬26)と告白する。このことから明らかなように、ジルベルトは少年の「私」を心底から愛していたのである。ところが「私」は、それを反対に解釈し、愛されていないと決めつけ、「もう […] 会わない決心」をしたのだ。ジルベルトへの恋心においては、会わないでいる「苦痛」と、ばかにされたくない「自尊心」とが天秤のように張り合っている (I, 575; ③347)。「私」は「自尊心」を守る決心をし、二度と会わない「苦痛」をみずからに課したのである。語り手が「私は、自分のなかでジルベルトを愛する自我を残酷にもじわじわと自殺に追いやることに執念を燃やしつづけていた」(I, 600; ③398)と断っているように、ジルベルトへの恋心にさいなまれる「私」もまた、わが身に苦痛を与えるサドマゾヒストなのである。

主人公の「私」がさいなまれるアルベルチヌへの嫉妬もまた、スワンの嫉妬がさして根拠のないものであったのに似て、みずからつくりだした妄想ではないのか。アルベルチヌが同性愛（プルーストのいうゴモラ）の女ではないかという疑念がはじめて「私」の心に芽生えたのは、アルベルチヌが女友だちのアンドレとダンスをしていたとき、そばにいた医者コタールが「私」にこう指摘したからである。「鼻メガネを忘れてきたんでよく見えんですが、あのふたりは間違いなく快樂の絶頂に達していますよ。あまり知られていませんが、女性は何によりも乳房で快樂を感じるものなんです。ほら、ふたりの乳房がぴったりとくっついてるでしょう」(III, 191; ⑧435)。この指摘は、はたして正鵠を射ているのだろうか。プルーストは、そもそもコタールが正しい加減な医学的知見を振りまわす男であることをつねづね強調しているうえ、ここでもコタールに「ふたりの乳房がぴたりとくっついてるでしょう」と主張させておきながら、「鼻メガネを忘れてきたんでよく見えんですが」と言わしめている。もちろんコタールの発言が信憑性に欠けることを示唆するためであろう。医者の指摘を聞いた「私」は、アルベルチヌが「身体の奥から出てきたような、なんとも刺激的な笑い声をあげた」とき、

「アルベルチーナがどうやらその声で、秘かにおぼえた官能の震えをアンドレに教え、それを確認させたように感じられた」（同上）という。ここでも小説の本文は、アルベルチーナの笑い声の意味は「私」にそう「感じられた」と報告しているだけで、その印象が真実であるとはなんら保証していない。

第4篇『ソドムとゴモラ』の末尾で、アルベルチーナはヴァントウイユ嬢の女友だちとの親交を主人公に打ち明ける。「ほら、憶えてるかしら、あたしよりも年上の女友だちのこと、あなたに話したことがあるでしょ、あたしの母親がわり、姉がわりになってくれた人 […] 。で！ そのお友だちだけど […] 、これが、なんと不思議なことに、どんぴしゃり、そのヴァントウイユって人のお嬢さんの親友なのよ」（III, 499; ⑨580-581）。これを聞いた主人公は、かつてモンジュヴァンでのぞき見たヴァントウイユ嬢と女友だちの同性愛シーンを思い出し、恋人が「ゴモラ」の女であるという確信にとり憑かれ、ふたりの女が会おうのを阻止するため、アルベルチーナを自分の家に閉じこめてしまう。

しかしアルベルチーナは、ほんとうに同性愛者なのであろうか。留意すべきは、モンジュヴァンにおける「のぞき」の場面は、もちろんヴァントウイユ嬢と女友だちの同性愛を証明するものであるが、なんらアルベルチーナの同性愛の証拠たりえないことである。実際アルベルチーナは、のちに第5篇『囚われの女』で、ヴェルデュラン夫人邸から戻ってきた主人公に、最初の打ち明け話とは矛盾するこんな告白をする。「あなたが言いたいのは、あたしがヴァントウイユのお嬢さんのお友だちに育てられたようなものだと言ったのは嘘だと今夜聞いてきた、ということでしょ。たしかにちょっと嘘をついたわ。でも、 […] あたし、あなたから退屈な女だ、頭の弱い女だと思われるような気がしてたんで、そんなお嬢さんたちとつき合いがあって、ヴァントウイユの作品について詳しいことを教えられると言えば、あたしもあなたの目にすこしは立派に見えて、もっと親しくなれる、ってそう考えたの」（III, 839; ⑪332-333）。この相矛盾するふたつの告白は、読者を困惑の極に追いやらすにはおかない。どちらのバージョンにも真実だと断定できる確証がないからである。

重要なのは、アルベルチーナの告白の真偽ではなく、むしろ同棲生活へと突きすすむ「私」の狼狽ぶりであろう。語り手はいたって冷静で、こう警告している。「問題は、アルベルチーナではなくて、この私なのだ。嫉妬に駆られた私が、勝手に、こちらが相手の心に誘発できる感情をあまりにも過小評価してしまうのである。おそらくはこうした間違っているやもしれぬ判断から、ふたりを見舞う多くの不幸が生じたのだ」（III, 508; ⑨600）。恋心とは、自分のものにならない「相手を所有したいという非常識で痛ましい欲求」（I, 227; ②114）だから、いったん恋心がかき立てられさえすれば、嫉妬に根拠があるか否かなど問題にならない。ブルーストは、人が「恋心に揺りうごかされ

る」とき相手にしているのは、恋人その人ではなく、「女性という外見をまとい付随的にその女性に寄り添っている […] 目に見えない力」(III, 511; ⑨606)であると指摘している。

第6篇『消え去ったアルベルチーナ』で恋人は「私」の家を出てゆき、やがて落馬事故で死んでしまう。ところが「私」は、アルベルチーナへの死後でさえ嫉妬にもだえ苦しみ、生前の恋人の素行調査のために給仕頭のエメを派遣する。エメからはアルベルチーナの同性愛を疑わせる手紙が届き、「私」は疑念を募らせる。エメの手紙には、そもそも興味ぶかい点がある。文章を書き慣れていないエメが「引用符で囲もうとすると丸括弧を書いてしまい […] 丸括弧で囲もうとすると、引用符で囲んで」しまい(IV, 96; ⑫220)、また引用符を完全につけ忘れてしまう点である。

この奇妙な書き癖のせいで、まるで暗号と化した文面が、それを解読する「私」の不安をいっそう募らせる。『ソドムとゴモラ』の「心の間歇」の章において、「私」がホテルの支配人の「しいしん」なることばから祖母の「失神」を解読するのを余儀なくされたとき、その解読が「私」の心中の衝撃をなお募らせたのと(III, 175; ⑧398-399)、事情は同じだろう。「私」はエメの報告で、アルベルチーナがさまざまな女とシャワー室に閉じこもっていたという「シャワー係の女」の証言に衝撃を受けるが(IV, 97; ⑫221-222)、この報告はシャワー係の発言をエメが伝えた二重の間接的証言であるうえ、そもそもシャワー係は同性愛の現場など見ていない。そのとき「私」が思い出した「あの女はどうやら虚言癖があるようね」(IV, 101; ⑫231)という祖母の発言も、シャワー係の証言が信頼できないことを示唆している。

エメは、ボンタン夫人の別荘のそばの「洗濯屋の小娘」からも、アルベルチーナの同性愛の実態を聞きだす。アルベルチーナが洗濯屋の娘の愛撫を受けて「ああ！ あなた、すごくいいわ」(IV, 106; ⑫241)と口走ったという報告に「私」は衝撃を受けるが、これとて二重の間接的証言である。おまけに娘の証言は、エメが「ご下命には完全に従おう、お気に召していただくためならなんでもやろうという覚悟で」、酒を「娘に飲ませ」たばかりか、「娘をさそって寝た」ことによる成果なのだ(IV, 106; ⑫240-241)。これもまたエメの証言の信憑性を疑わせるに足る記述といえる。要するにアルベルチーナをめぐる「私」の嫉妬も、ジルベルトへの恋心の苦しみと同じく、自分の妄想がわが身にひきおこした苦痛なのである。

『失われた時を求めて』に登場するユダヤ人の代表格ともいえるべきスワンやブロックは、社交界のユダヤ人蔑視を知りながら、スパイ容疑の嫌疑をかけられたユダヤ人ドレフュス大尉への支持を公言して、みずからサロンの笑い者になる。上流社交界の寵児であり、ゲルマント公爵夫人の長年にわたる交誼をえて「社交生活の演技を確実に自家薬

籠中のものにしていた」(II, 867; ⑦518) スワンでさえ、ユダヤの出自をめぐる屈辱をあえてわが身にひき受けるかのごとき言動を見せる。

そもそもスワンは、不治の病に冒されたときも、ゲルマント夫人が社交界への出席をいかに重視しているかを心得て、夫人にはわが身の不幸を安易に打ち明けない慎みを持ち合わせていた。ふたりの会話のつぎの抜粋を読むだけで、スワンの遠慮は十二分に理解できよう。

「で、どうでしょう、私たちとイタリアにいらっしゃいません?」「奥さま、それが行けそうにありません。」[…]

「どうして十ヵ月も前から行けないとおわかりになるのかしら。」「お親しい公爵夫人さまのことすから、どうしてもとおっしゃるのなら申しあげますが、なにしろこのとおりの体調がひどく悪いものでして。」[…]

「で、要するに、イタリアにいらっしゃれない理由とは?」「いや、それは、親しいおかたですから申しあげましょう、その何ヵ月も前に死んでいるからです。」(IV, 881-882; ⑦552-553)。

ところがこの慎重なことば遣いは、自分の信念であるドレフュス支持が問題になると発揮されない。かねてドレフュス主義を公言していたロベール・ド・サン＝ルーと「私」とを相手にしてスワンは、ドレフュス再審を推進して被告に恩赦を与える穏健共和派の大統領ルーベを持ち出してこう言う。「ルーベは全面的にわれわれの味方だそうです、完全に確かな筋から出た情報でね。こんなことを申しあげるのも、おふたりがどこまでもわれわれと一緒に歩んでくださるものと承知しているからです」。ところがロベールは、すでに事件から足を洗っていて、スワンに「こんな事件に首を突っこんだのを大いに後悔しているんです」と連れない返事をする(III, 97; ⑧227)。こんなふうに分をみずから屈辱的な状況に追いやるスワンもまた、サドマゾヒストだと言えるのではなからうか。

横柄な口をきく図々しい男として描かれるブロックも、内面には傷つきやすい繊細な心を宿している。ブロックが第3篇『ゲルマントのほう』におけるヴィルパリジ夫人のサロンでうっかり花瓶をひっくり返して割ってしまうへまをしたとき、「いや、なんでもありません、ぜんぜん濡れませんでしたから」(II, 513; ⑥97)と強がってみせ、小声で「召使いの^{しやう}僕がなっていないから花瓶の置きかたもわからず、お客をびしょ濡れにしたり怪我までさせたりしかねないんだ」(II, 514; ⑥99)と自分の失態を女主人のせいにする。しかし語り手は、ブロックがそのじつ「傷つきやすい『神経質な』タイプの人間」であると指摘して、こう言う、「その手の人間は自分が不手際をしたことに耐え

られず、それを認めない。認めてしまうと、一日が台なしになるからだ。ブロックは憤慨してはいたものの、心中は暗澹たるもので、社交界には二度と戻りたくなかった」(同上)。

そんなブロックがいつそう窮地に陥るのは、ユダヤ人ゆえのドレフュス支持を公言し、ゲルマント家のメンバーに同意を得ようとしたときである。ブロックがベルギー公使のアルジャンクール氏に「あなたはきっとドレフュスを支持しておられますね、外国じゃみんなドレフュス派ですから」と言うと、氏は「それはフランス人同士のあいだでしか問題にならない事件だ、とおっしゃりたいのでしょ？」と答え、暗にブロックはフランス人ではないとほのめかす。語り手はアルジャンクール氏の発言について「相手が今しがた口にした意見とは逆の見解、つまり相手がとうてい同意できないのが明らかな見解、それを相手の意見にしてしまおうとする特殊な横柄さが認められた」と辛辣な注釈を加えている(II, 543; ⑥169)。

ブロックは「失地を挽回せん」として、今度はシャテルロー公爵のほうをふり向き、「失礼、あなたはフランス人ですから、外国じゃみんなドレフュス派だということをきってご存じでしょう」と同意を求める。しかし公爵は、みながブロックを敵視していることを承知する「社交界にありがちな卑怯な男」として、こう答える。「申しわけありませんが、あなたとはドレフュスについて議論できないのです。この事件については原則としてヤフェト族同士でしか話さないことにしているもので。」「ヤフェト族」とは、アリア系白人の祖先を指すとされる「創世記」の用語である。ブロックは「自分のユダヤの血筋や、いくぶんシナイ山に起因するおのが一面について、皮肉な自嘲のことは口にする」余裕がなく、おめでたいことに、とっさにこう言ってしまう。「でも、どうしてわかったんです？ だれが言ったんです？」(II, 544; ⑥170-171)。

ブルースト自身は、母親から受け継いだユダヤの出自を自覚し、社交界の保守性を承知していたから、自分のユダヤ性にかんして軽率な発言を控えていた。1896年5月、社交界の先輩ロベール・ド・モンテスキウに宛てた手紙でブルーストは、こう語っている。

「ユダヤ人についてのお訊ねに、昨日はお答えしませんでした。私自身は父や弟と同じくカトリックですが、それにたいして母はユダヤ人〔ユダヤ教徒〕であるというごく単純な理由からです。これがこの種の議論を差し控える充分な理由になることはご理解いただけるかと思います」(Corr., II, 66)。さきに見たようにブロックは、とっさにブルーストのような賢明な受け答えができず、侮辱を受けざるをえない窮地にわざと自分を追いやる。このブロックの言動もまた、サドマゾヒスト特有の振る舞いと解釈できるのではないか。

屈強で凶暴な男に鞭打たれたいというシャルリュス男爵のファンタムに戻ると、男爵のサドマゾヒストたる快樂は、そのユダヤ蔑視とも受けとれる言説にも認められる。男爵は、すでに『花咲く乙女たちのかげに』で激しいユダヤ嫌悪を口にしていた。「ル・ノートル設計のフランス庭園」が「裕福な金融資本家のイスラエル一族」に買いとられたことで「辱めをうけた」と嘆き、「イスラエル一族は監獄にぶちこまれて然るべき」だと息巻いていたのだ (II, 123; ④272-275)。『ゲルマントのほう』でもシャルリュスは「私」を相手に、ユダヤ蔑視の弁舌をふるう。フランスに同化したユダヤ人であるブロックのことをフランス人ではないと断言し (II, 584; ⑥258)、ユダヤ金融資本家を毛嫌いするあまり、当時フランス銀行理事であったアルフォンス・ド・ロチルド男爵の夫人のことを、わざと「ド」を省いて「アルフォンス・ロチルド夫人」と言い、ロチルド家を貴族と認めていないことを誇示する (II, 590; ⑥273)。ところがその一方で男爵は、ブロックがユダヤ会堂で「割礼」や「ユダヤの歌の合唱」や「聖書に基づく寸劇」などを見せてくれることを願い、ダビデが巨人ゴリアトを投石で倒したように、ブロックが「父親を叩きのめす」シーンや「はす^{ハス}つ^ツぱの母親をめった打ち」にする場面を演じてほしいと懇願して「私」を驚かせる (II, 584; ⑥259)。

この一節では、「こんな身の毛もよだつ、まるで気が狂ったかと思えることばを吐きながら」シャルリュスが「私」の組んだ「腕を痛くなるほど締めつけた」 (⑥260) というボディ・ランゲージも見落としてはならない。これは男爵の「私」にたいする欲望の昂ぶりを示すものにほかならない。ユダヤ蔑視に聞こえるシャルリュスの言辞の裏には、『見出された時』の男娼館で屈強な若者にわが身を鞭打たせるときと同様、「監獄にぶちこまれて然るべき」ユダヤ人の「残忍」な暴力への憧れが隠されているのである。この一節には、ユダヤ人のサディズムを想い描いて被虐的昂奮をおぼえるサドマゾヒストたる男爵の欲望が露呈していると考えられるべきであろう。

『ソドムとゴモラ』でシャルリュスは、ブロック一家がバルベック近在の「ラ・コマンドリ」(元来は騎士修道会の所領名)と称する別荘に住んでいることを知ると、一家がパリでもキリスト教にちなむ由緒正しい名称の通りに居を構える可能性があると指摘し、これを「あの人種に特有の、奇っ怪な冒瀆趣味」 (III, 490; ⑨560) だと、ユダヤ人糾弾の長広舌をふるう。ここで語り手が「この長広舌は——文言の表面にこだわるか、文言に秘められた意図に重きを置くかによって——反ユダヤとも親へブライとも受けとれる」 (III, 492; ⑨566) と指摘するように、シャルリュスの言辞は、その「文言の表面」はユダヤ蔑視に見えて、その「秘められた意図」はブロックへの性的欲望に貫かれているのだ。「貸し馬車」で帰宅したというブロックを呼び戻すのは不可能だと悟ったシャルリュスは、「冗談にまぎらせよう」として、「なるほど、余計な二人乗四輪箱馬車には尻込みしたんだろう。それではクーペのやり直しになってしまうからな」とつぶや

く。この「冗談」は、ユダヤ人の「割礼」へのあからさまな暗示にはかならない（⑨567と注657参照）。ここでもシャルリュスのユダヤ人糾弾の裏には、ユダヤ人の冒瀆（サディズム）をわざわざ想像してマゾヒストの昂奮をおぼえるサドマゾヒストの欲望が提示されていると考えるべきだろう。

このようにサディストとして自分に苦痛を与え、マゾヒストとしてその苦痛を快楽とする心的構造は、ボードレーが『悪の華』の有名な詩篇「ワガ身ヲ罰スル者」で謳った詩句、「おれは傷であって短刀だ！／平手打ちであって頬だ！／〔…〕犠牲者であって刑吏だ！／おれはわが心臓に喰いつく吸血鬼／——あの大いに見捨てられた者のひとりだ」を想わせる。

興味ぶかいのは、ボードレーがこのサドマゾヒストの状況を詩人の、ひいてはすべての芸術家の宿命とみなしているように感じられることである。ブルースト自身もまた、この種のサドマゾヒズムを『失われた時を求めて』の究極のテーマである文学的創造と深く結びつく不可欠なものと考えていたふしがある。鞭打たれるシャルリュスの快楽を目の当たりにした「私」は、「シャルリュス氏が小説家や詩人でないのは、なんと残念なことだろう！」（IV, 410; ⑬354）と嘆く。もちろん語り手は、シャルリュスが「芸術においては一介のディレタントにすぎず、ものを書こうと考えもしなければ、その才能を備えてもいなかった」（IV, 410; ⑬355）と断っている。バルザックの熱心な読者であり古今の音楽や絵画にも精通するシャルリュスの教養は、創作へと向かわず、もっぱら才気あふれるおしゃべりに費やされていたというのである。にもかかわらず「シャルリュス氏が小説家や詩人でない」のを「私」が残念に思うのは、サドマゾヒストたる「氏に目にするものを描いてもらおうという」猟奇趣味ゆえの関心ではなく、こんな理由からである。「シャルリュスのような人間が欲望と向きあうときに置かれる立場は、身辺にスキャンダルをひきおこし、人生を真剣に考えさせ快楽にも喜怒哀楽を込めさせて〔…〕たえずその身に苦痛の激動を生じさせるからだ。男爵が愛の告白をするとはぼそのたびに、監獄行きの危険こそ免れるにしても、公然と侮辱を受ける」（IV, 410; ⑬354-355、傍点は引用者）からだという。

実際、男爵は何度も「私」に言い寄るが理解されず、ホテルの給仕頭エメにはラヴ・レターまで送りつけるがその意は伝わらず（III, 380-382; ⑨322-325）、親身に面倒をみたモレルとは結局「プラトニックな」関係しか持てず（III, 382; ⑨325-326）、最終的には裏切られてしまう。男爵はそのモレルを「殺めようと決意を固めていた」（IV, 384; ⑬298）と告白するほどの苦痛にさいなまれたのである。

さてブルーストは、このような「公然と侮辱を受ける」事態、「その身に苦痛の激動を生じさせる」状況こそ、「人生を真剣に考えさせる」がゆえに「小説家や詩人」にと

って必要不可欠なものと考えている。ブルーストは「かりにシャルリュス氏が小説家であったなら、氏のためにジュピアンが整備したこの館は、いかなる魂胆の持主であるか街路では判然としない男に関わる危険をすくなくとも大幅に減少させてくれる点で […] 氏には不幸なことであつたろう」(IV, 410; ⑬355)とまで断言する。それほど、なによりも「苦痛の激動」を作家に不可欠な養分とみなしていたのだ。「幸福」な人は人生を想いわずらう必要はなく、「苦痛」こそが人間の心をゆり動かす原動力だからである。この意味で、第6篇『消え去ったアルベルチヌ』の冒頭、女中フランソワーズの告げる「アルベルチヌさまはお発ちになりました!」という文言につづく、「心理の探究において、苦痛はなんと心理学をもはるかに凌駕することだろう!」(IV, 3; ⑫23)という感慨は、ブルースト自身の小説作法の表出のように感じられる。

ブルーストは、苦痛こそが芸術や小説の創作に必要不可欠なものであるから、芸術家たる者は、みずから苦痛を与えることに歓びを見出すサドマゾヒストたらざるをえない、と考えていたのではなかろうか。特殊性性愛に見えるサドマゾヒズムは、じつのところ『失われた時を求めて』の中心主題である文学創造と密接に結びついているのだ。その証拠に、ブルーストは『見出された時』でこう言う。「芸術家とは、意地の悪い人間であるというよりも、むしろ不幸な人間なのだ。 […] 侮辱を受けたことによる怨恨や捨てられた苦痛は、そんな目に遭わなければ決して知る機会のない秘境であり、その発見は、人間としてはどれほど辛いことであろうと、芸術家としては貴重なものになる」(IV, 480; ⑬503)。

『見出された時』の有名な文言、「作品は、掘抜き井戸のようなもので、苦痛が心を深く穿てば穿つほど、ますます高く湧きあがる」(IV, 487; ⑬516)ということばも、このような文脈で理解すべきだろう。ブルーストは、さらにこう付言している。「肉体にとって健康にいいのは、幸福だけ […] である。しかし精神の力を強化してくれるのは悲嘆である。そもそも悲嘆は […] 習慣や懷疑や軽薄や無関心という雑草をひき抜いてわれわれを真実へとひき戻し、ものごとを真剣に考えるよう強いる」(IV, 484-485; ⑬511-512)。

苦痛が小説の深い源泉であり、芸術の普遍性の根拠である理由について、『失われた時を求めて』のつぎの一節ほど説得的に語っているものはないだろう。「知性の光がそれを照らして分析してはじめて、人は自分が感じたもののすがたを見分けることができるが、それにはなんという苦痛が伴うことだろう。しかし私は、自分が最初ジルベルトのときに知った苦痛、つまりわれわれの恋はその恋心をかき立てた相手に属するものではないという苦痛は、有益であることにも気づいた。 […] 苦痛が有益である主たる原因は、われわれの恋がただジルベルトへの恋であるにとどまらず(これはわれわれをひどく苦しめる考えである)、アルベルチヌへの恋でもあるからではなく、その恋

がわれわれの心の一部だからにほかならない。この心は、われわれのうちでつぎつぎと死んでゆくさまざまな自我、にもかかわらず利己的にそのときどきの恋を保持しようとするさまざまな自我よりも永続性を備えていて、われわれにどのような苦痛を与えようとも——といっても役に立つ苦痛であるが——恋する相手からわが身をひき離して恋の普遍性をとり戻そうとし、そうして獲得された普遍的な恋を、その恋について理解したことを、つぎつぎと経過したそれぞれの自我が一体となりたいと願ったあれこれの女性にたいしてではなく、あらゆる人にたいして、つまり普遍的な精神にたいして提供しようとするのだ」（IV, 475-476; ⑬492-494）。

このように考えると『失われた時を求めて』に描かれたサドマゾヒズムの苦痛は、ヴァントウイユ嬢やシャルリュス男爵という同性愛者の特殊な快楽というにとどまらず、本作の主要人物たちに見られる重要な振る舞いであり、それは本作の根本主題である文学創造に必要不可欠な基盤であることがわかる。冒頭に挙げたプルースト特有の回想や印象の美しさも、苦悩の闇が全篇を覆いつくしているからこそ、いつそう輝くのではなかろうか。本稿の結論として、プルーストのつぎの美しい一節を引用して読者の瞑想に供したい。「私は言おう、芸術の残酷な法則は、人間が死ぬことにあり、つまり、われわれ自身があらゆる苦しみを嘗めつくして死ぬことによって、忘却の草ではなく、永遠の生命をやどす草、豊穡な作品という草が生い茂ることにあり、その草のうえには何世代もの人びとがやって来て、その下に眠る人たちのことなど気にもかけず、陽気に「草上の昼食」を楽しむだろう、と」（IV, 615; ⑭281）。